

調査資料

タウンスケープ'70, 雑賀崎

吉田 襄* 光井 雅典** 佐藤 展啓** 大島 文雄**
 平井 和生** 石井 睦規** 小野 陽子**

Townscape Architecture at Saika-Zaki, Wakayama-District, Japan

by Yuzuru Yoshida*, Masanori Mitsui**, Nobuhiro Sato**, Fumio Oshima**
 Kazuo Hirai**, Mutsunori Ishii**, Yoko Ono**

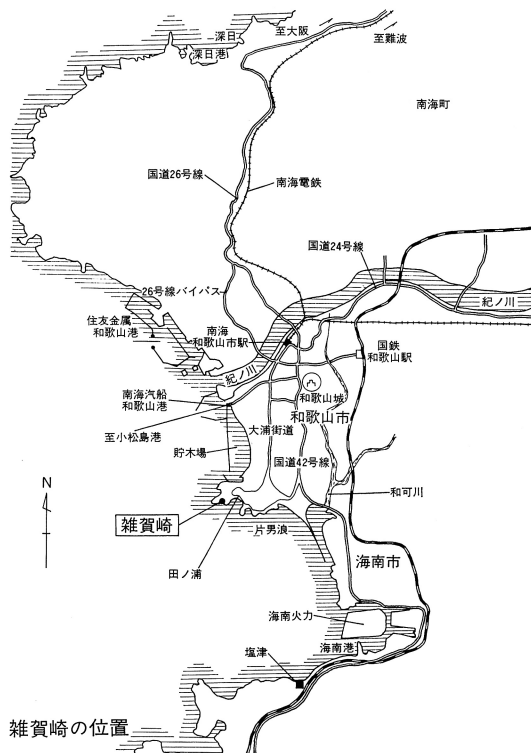
1. 雑賀崎の概要

雑賀崎は独特の海岸美を誇る景勝地であり、海も山もそして集落もまた鮮明な特色をもち、粋人の興味をそそるに十分である。和歌山市の西南雑賀山系の最先端に位置し、新和歌浦から田の浦さらに岬を越えると雑賀崎である。この一帯は昭和25年6月瀬戸内海国立公園地域に編入された。

雑賀崎は言伝えによれば南紀州の海賊（熊野水軍）が漂着して定住し、その後屋島の戦に水軍として熊野から雑賀崎の漁師が出陣したといわれている。（雑賀崎連合会長宮下賢一氏の話）背後に雑賀山系の自然の要塞があり、外海からは死角になる。また海が近いわりに良い水脈があり、井戸が掘れたことなどが定住の要因と考えられる。雑賀崎の地名の由来は紀伊続風土記によると「海部郡、雑賀荘上、雑賀崎浦、田畑高88石1斗4升4合、家数 357軒、人数 1,492人、西浜村の岬25町許にあり西浜の分れ村という。和歌浦出島の西山行26町、雑賀山の西の端にして海面に突出たる岬なれば雑賀崎の名あり。一村漁を業とするを以て船数は 200余隻ありて田畑は僅に百石にみたく西浜皆荒磯にて石巖海に臨み峻峻最甚し巖下深さ測りがたし海鱗多く集まる所をもって城下の釣客雑沓として四時絶えず」とかかわれている。

16世紀日本は全国的な内乱状態（戦国時代）に入ったがそのころ雑賀衆（和歌山市付近で勢力を誇った豪族）が大きな勢力を示すようになってきた。

雑賀荘を総支配した人物に雑賀孫一、本名を鈴木孫市



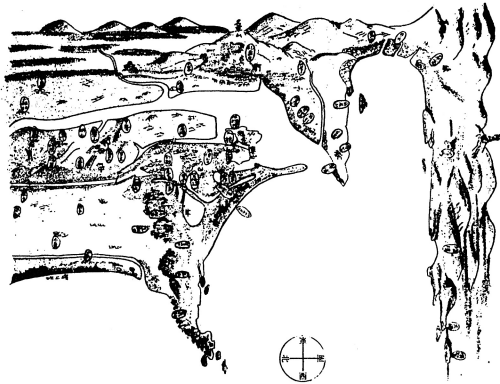
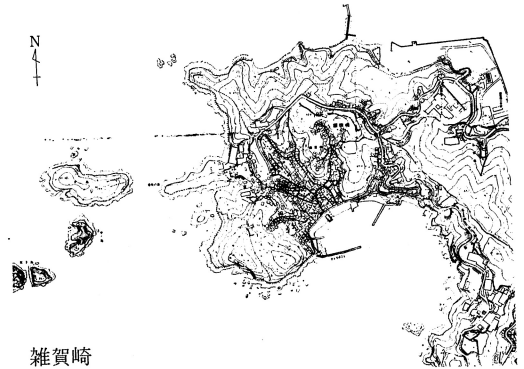
* 建築学科助教授 Assistant Professor, Architectural Division

** 建築学科 Architectural Division

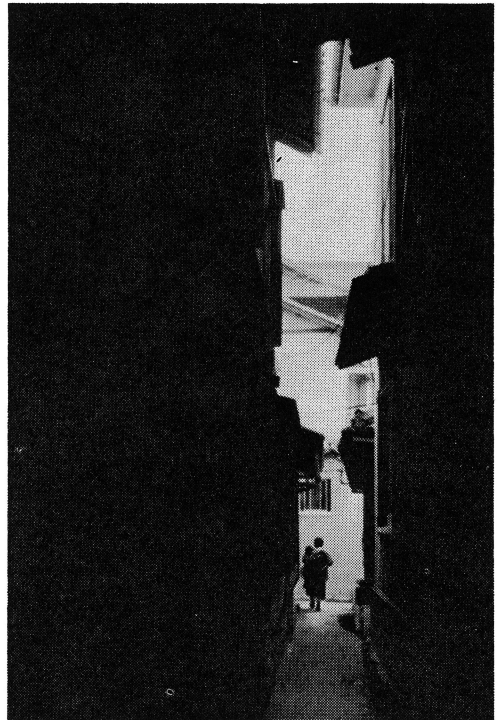
と言ひ雑賀の莊，和歌浦妙見山に居城俗称に雑賀を称した。孫市は優れた智謀の将で，戦術はすばらしいもので信長がその戦法を覚え長篠合戦その他諸戦に応用した程である。殊に天正元年既に鉄砲三千挺を有し勢力を示した。天正5年（1577）織田軍勢が雑賀を攻めた時，織田方が大敗した。雑賀勢はこの戦に一郷の滅亡を覚悟していた所，思いがけぬ勝利を得たので大変喜び，孫市は狂うがごとく脇差をささえとして関戸矢の宮で乱舞した。これは現在雑賀踊として毎年和歌祭の中で披露されている。和歌祭は東照宮の造営を記念して天和8年以降東照宮祭礼として毎年5月17・18日の両日大行列をくり出している。

その後天正13年，豊臣秀吉が根来征伐の余勢をかけて太田城を攻めたとき，雑賀党は太田左近党に味方したが敗れ没落した。

雑賀崎は元来宅地のスペースに限りがあり，昔は自給自足が困難で次男三男は出稼ぎ移住を余儀なくされた。彼等はまとめて全国各地の漁港へと新天地を求めて散った。雑賀一族の血縁の結びつきは非常に強く，後年箕島の雑賀伊一郎氏らが発起人になり全国雑賀一族にゆかりのある人々に呼びかけて東照宮で「雑賀一族会」が発足している。現在会員は200名前後で「和歌山」「東京」「新潟」「島根」をはじめ22都道府県にまたがっている。



和歌浦古図 (コピー)



2. 漁業

雑賀崎はもともと一本釣り漁業としてほそぼそと、生計をたてていた。しかし現在では年間水揚げ金額3億円近くもある裕福な漁村である。

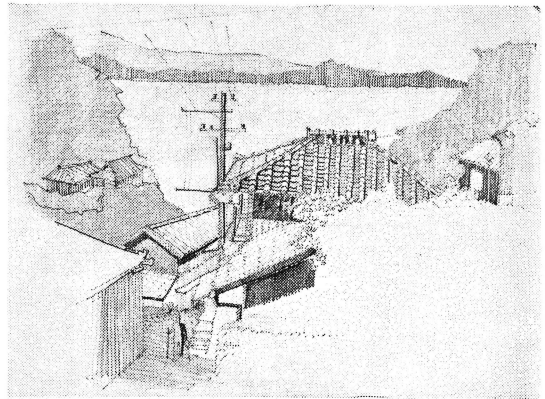
この様に豊かになって来たのは最近のことで、戦前の雑賀崎はまだまずしい漁村であった。生活があまりにも苦しく、子供達は小学校にも満足に行けず家計を助けるために漁場へまたは他の地域に働きに出なければならなかった。

彼らの主な漁場は白浜（和歌山）から伊豆諸島（東京）、五島列島（九州）にまで及び、小さな舟を「ろ」であやつりながら荒海へと出漁していった。一度海に出ると数カ月は港に帰らない事が多く九州近海などの遠い漁場では、その日のうちに近くの港に立ち寄り、魚を売っては次の漁場へと向かう生活が昭和7～8年頃まで続いた。

太平洋戦争後、優秀な船が建造されるにしたがって漁獲量も多くなり、本格的な小型底引き漁業へと移行して行った。さらに昭和35年頃から焼玉エンジンがディーゼルエンジンに変り漁場が時間的に近くなり、港も整備され現在は1本釣り漁船166隻、底引き漁船101隻、組合員数627人（44年現在）水揚げ金額2億7千万円の状態になって来ている。

ここで良く取れる魚類は、い・か、たい、えび等が多く近年では、のり養殖、たこの畜養などが、さかんに行なわれており、積極的に資源確保に努めている。

面積 0.148km²、戸数 562、人口 1,930、人口密度 130人/ha、就業率48%、その内漁業に41%が従事している。年令層は25才～35才前後の比率が多く、日本各地に見られる離村の状態はあまり見られない。背後に新和歌浦旅館街、その外側には木材港、重工業地帯がとりまいており、その結果、ヘドロや廃油に悩まされ、公害の影響をうけつつある。



3. 集落の構成

3.1 集落

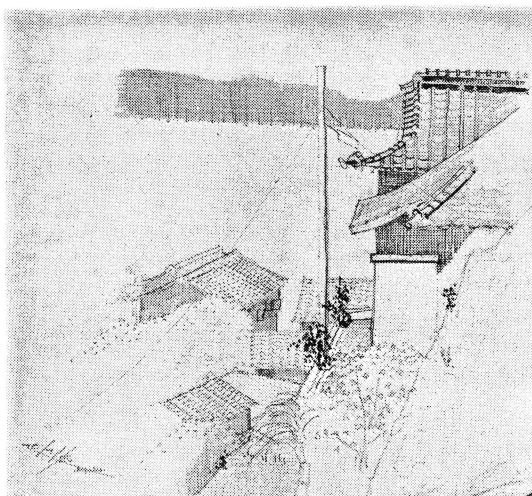
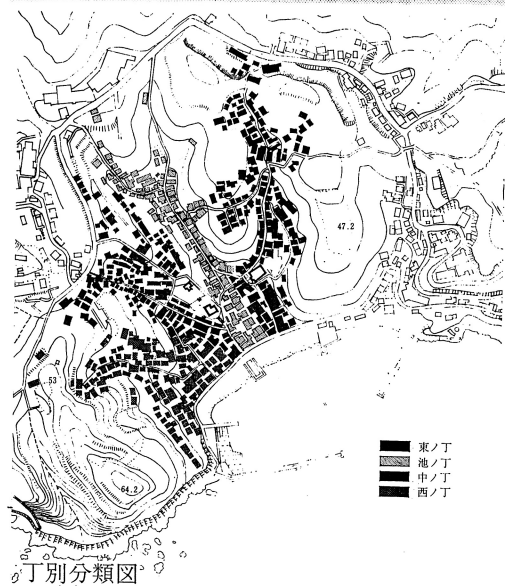
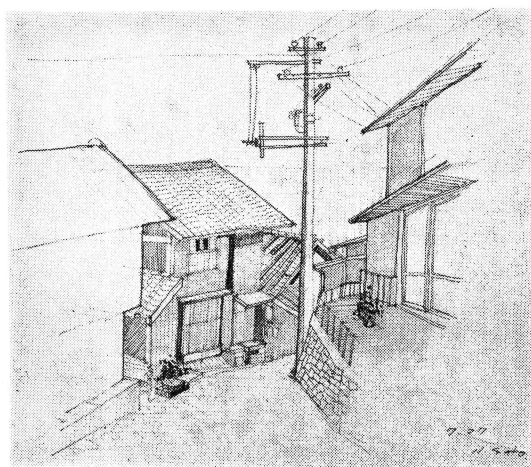
雑賀崎の集落是和歌浦湾に岬状に突出した尾根から張り出す台地の谷間の部分に、東西 500m、南北 600mに手のひらの様に海に向かって展開している。湾に面した他の集落、田の浦、塩津等も基本的には同じ形態をとっている。

集落へのアプローチは尾根上を走る道路から浜へ下る曲りくねった道によるか、海から近づく方法かである。古くは海路が唯一のものであったことは古図その他で知ることが出来る。浜に沿って走る道は尾根から下って来る唯一の自動車の通れる道（西端で行き止まりとなる）であり、浜と一体化してオープンスペースの機能も果している。この道に沿って山側に防波堤の役目を果たすコンクリートまたは石積みの壁があり、これによって集落は浜と隔離されている。生活面での生産的要素はすべてこの壁に接した面と浜で処理され、集落内部には全く持込まれていない。壁に開かれているいくつかの小さな入口（我々はゲートと呼んでいる）から、集落内部に入ると様相は一変する。ゲートから山に向かって延びるこみち（我々は縦の道と呼んでいる）を軸としてそれぞれ西の丁、中の丁、池の丁、東の丁と呼ばれる部落を形成していて、幅 1M000～1M500 程度の不規則なふくらみを所々に持つ坂道と階段で構成された縦の道に沿って、隙間なく建ち並んだ家々の軒先が張り出し、道は少しずつ方向を変えながら玄関やすだれの下った出窓をかすめつつ、屋根に向かって登る。壁からつき出した袖看板や外灯と共に洗濯機やたらい、鉢植やバケツなどが無雑作に置かれている。

集落の内部には井戸が点在しており、縦の道はこれらを結ぶような形で作られていて、井戸は数軒から三十数軒で共同使用されている。井戸の回りや道のふくらみの部分は子供達のあそび場や大人達の語らいの場になっている。

浜を走る道をのぞいては集落内部に縦の道を結ぶよこの道は主要なものではなく、各部落は縦の道を軸として独立しており、この形態は血縁関係や日常生活の流通関係からオープンスペースの利用形態に至るまで整然と行なわれている。

集落内の景観は一般の住宅地や農村の集落などとは全く異なっている。道を行く歩行者の視野は、建築的な統一のない空間の中でさえぎられて行く。断続的に開ける空と海の見える所以外は、視野はすべて地域内に限定され、囲まれた一つの連続的地域が強く意識される。



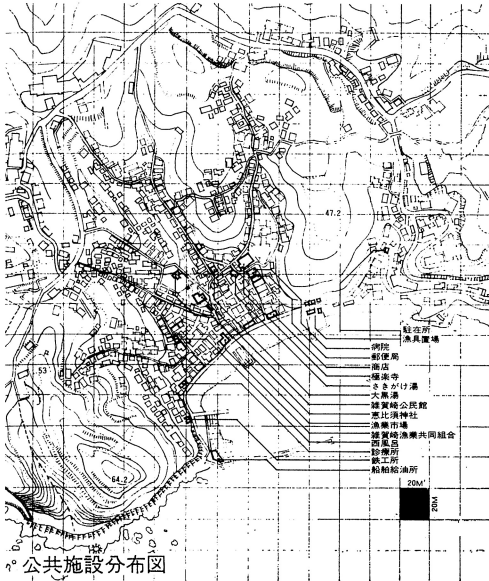
人々の生活は、廊下的空間である縦の道を中心に、すべての家は、道に続く土間を通じて強力に結びつけられ、単なる視覚以外に道への依存度が大きく、地域としての生活の統一感を生み出しているのではないかと思います。地域の精神的な結びつきを支えるこの地の宗教である浄土真宗の寺「極楽寺」の屋根が視覚的に大きなボリュームを持って、ランドマークとして存在している。

住居のプランには一定のパターンは見られないがすべて開口部は道に面して開く様な形で配置されており、道と住居内部の空間とは視覚的にも空間的にも連続しているばかりでなく、生活行為の一部も道まではみ出した形で行なわれており、さらに道を隔てて向い側の住居内部まで連続性が及ぶこともある。また集落の立地条件から高度差によって視界が開け、距離的にはなれた住居相互の内部まで見透せたり、話を交したりしている。

集落は海に近い部分（壁から80M位までの部分はほぼ平地であり井戸もこの部分に比較的多い）に大規模な家や格式のある古い家が多く、また古い地名も多く残っており、山の手に行くに従って家の規模は小さくなり、古い家も少ない。雑賀崎には古くから核家族居住、末子相続の習慣があり、親から独立して分家した長男、次男達が次第に山の手へと発展して行ったのであろうか。

3.2 集落への入口

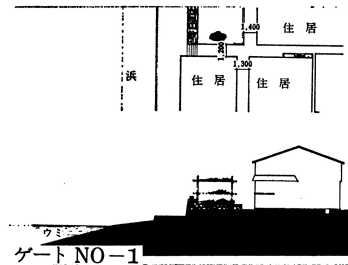
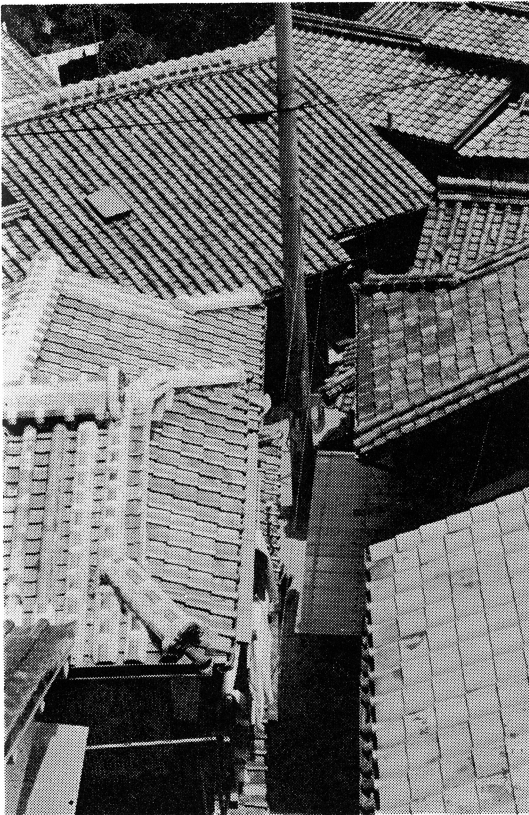
雑賀崎は浜と集落が石垣で仕切られており、石垣を切り取ったいくつかの入口（幅1.000~1.200の間隙）で浜と結ばれている。入口（ゲートと我々は呼ぶ）はその様な異質空間を結ぶ結節点である。しかしこのゲートは結節点にふさわしい装置や建築的に秩序ある空間の処理がなされているわけではなく、数段の階段と壁の切口によって異質空間をつないでいるに過ぎない。その建築的、造形的無秩序さが雑賀崎の特徴の一つでもある。



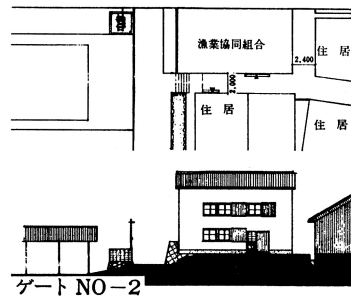
公共施設分布図



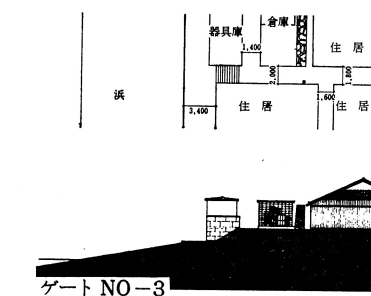
集落への入口位置



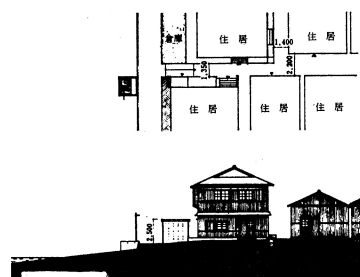
ゲート NO-1



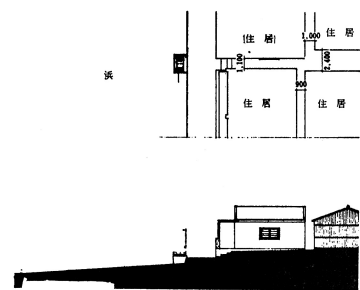
ゲート NO-2



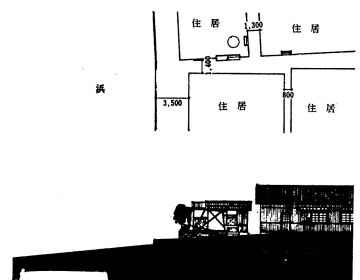
ゲート NO-3



ゲート NO-4



ゲート NO-5



ゲート NO-6

3.3 オープンスペース

オープンスペースは、形態的には広がりを持った空間や、道に付属したアルコーブなどをさすが、むしろ人々の空間の利用の仕方によって決ってくるといえる。

雑賀崎における最もオープンスペース的な場所は浜である。地形上、集落内にまとまった広いスペースを持つ事が出来ないで浜は多目的かつ高密度に利用される。

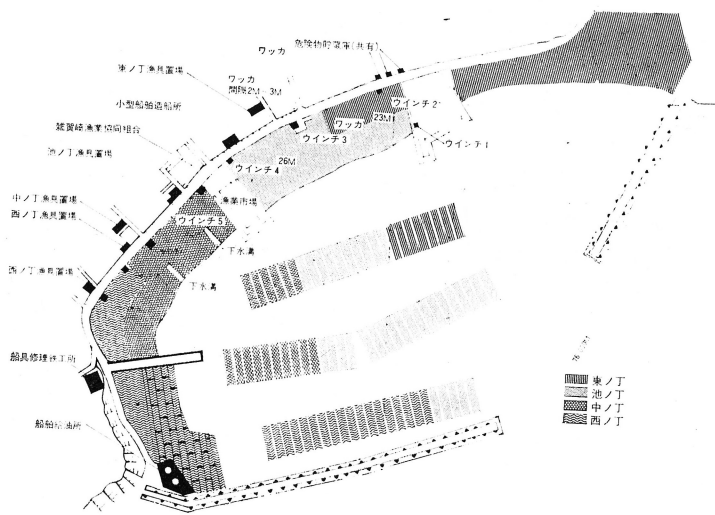
浜は時間帯によって男達の漁の準備や漁船・漁具の修理の場所として、漁獲物の荷上げ、せり市の時には人々のコミュニケーションの場として、昼間は子供達の遊び場や商人達にも利用される。8月15・16日には祭りのスペースとして人々が集まり、集落中央部分台地上の神社と関連して使用される。日常の浜の利用は、船の停泊スペースも含めて各丁ごとに区分して使用される。

集落中央部の台地上に恵比須神社と公民館があり、境内からは集落全体を見渡せる。スペースは広くはないが視覚的には大きく開けた集落内唯一の場所である。

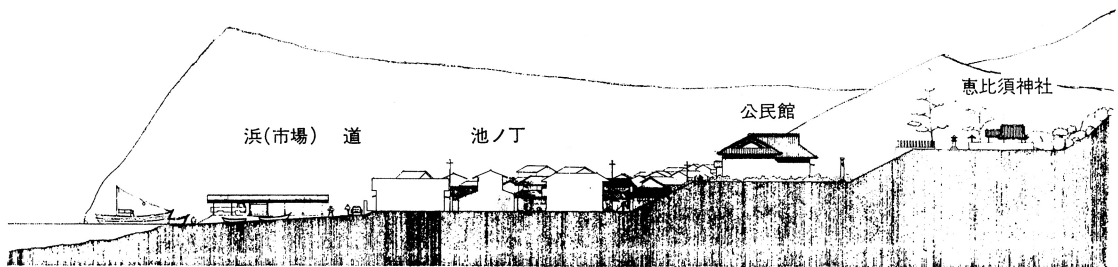
極楽寺境内は集落内部における数少ない広がりのあるスペースであるが、宗教的集まりの他にはあまり利用されていない。利用の仕方から来る意味でのオープンスペースは縦の道で、断面の形態からいっても、その大きさからいってもふんい気の高まりを可能とする要素を持っており、特に井戸の囲いやアルコーブの部分は人々によって高度に利用される。



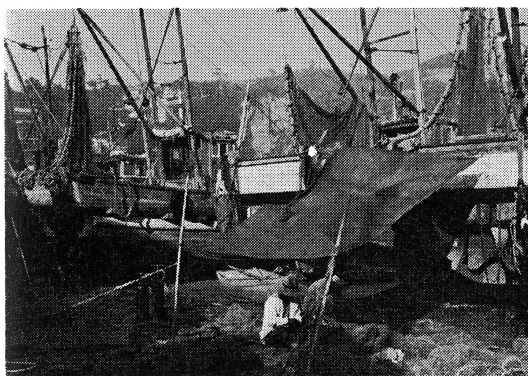
祭礼時のオープンスペース利用



浜の勢力範囲

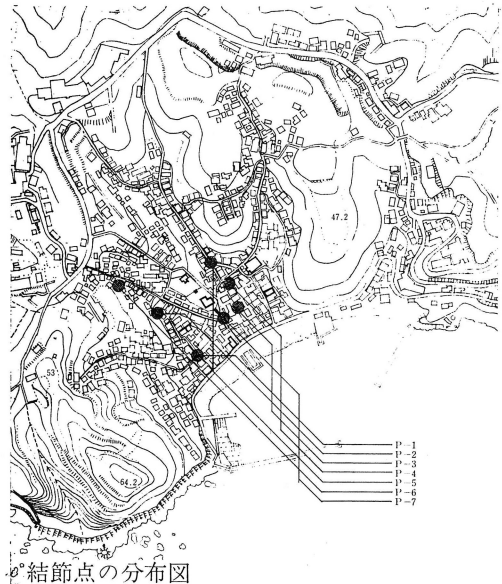


池ノ丁の断面図

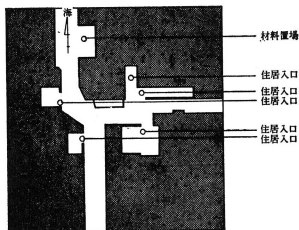


3.4 結節点

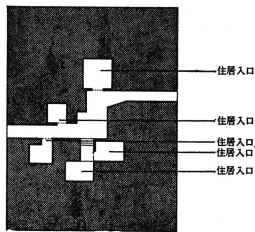
雑賀崎集落内部の結節点は、ゲートを含めて、かなり多くの地点が考えられるが、機能上、空間構成上、特徴あるものを7地点あげて調査した。



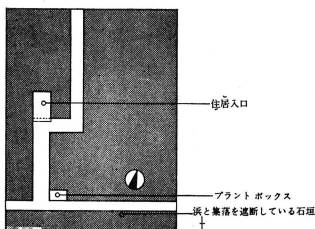
結節点の分布図



P-1



P-2



P-3

P-1

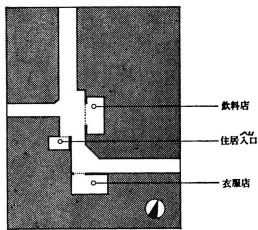
西の丁にあるこの結節点は西の丁の軸として延びる縦の道の浜からの入口付近にあり、山の手から降りてくる人々の視界を一度さえぎって海へ続く道と、右に折れる道の結合点となっている。

P-2

“折れ曲り”で構成され流れのクッションとなっている。住居の入口が巧みにずれてとられ、この結節点にはたえず人の目が注がれる。

P-3

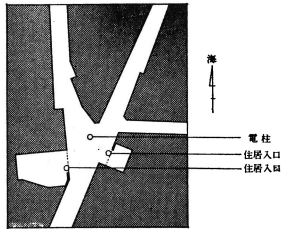
この道は廊下的ふんい気で構成されている。浜と集落を遮断している石垣に沿ってせまい路地に入ると、開放的な住居への入口につき当り廊下的「におい」を強くして道を歩く人と住居内部の人とのふれ合いのチャンスをつくっている。



P-4

P-4

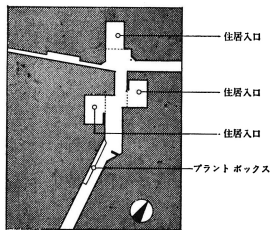
池の丁と東の丁のアメーバーの様にふわふわした丁境にあり、二方いずれの道からの視点も、壁または商点につき当りさえぎられている。店は赤電話も店内にあり、女達の語らいの姿が目立つ。



P-5

P-5

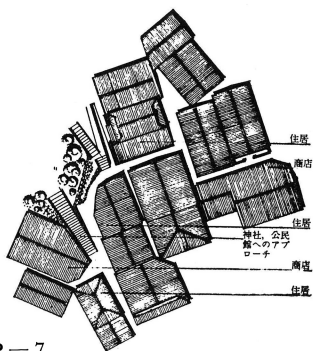
池の丁と東の丁を結んでいる結節点、山の手から降りて来ると電柱と建物がアイストップとなり、女達のたまり場になったり、連続する道のよどみとなっている。共同浴場とつながり、午後3時頃から夕方にかけて、ふんい気のもり上る所である。



P-6

P-6

中の丁の軸として山へ延びる縦の道からはずれており、周囲は建物の黒板塀が迫り、つき当りの住居入口はアイストップとなって次の行動へのクッションとなっている。



P-7

P-7

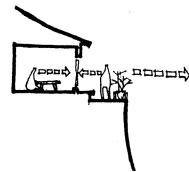
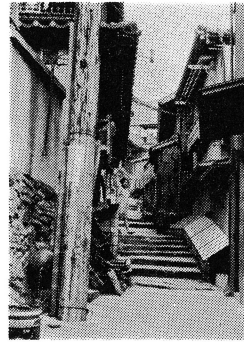
集落の中心軸となる縦の道の要の所にあり、つき当りに公民館・神社に続く階段があり、階段下のアルコーブを形成しながら石垣に沿ってゆっくり右に回り込むと正面に上る階段とこれと平行する路地と直行する路地に分れる開放的のふんい気を持つポイントである。

3.5 縦の道

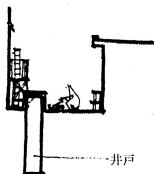
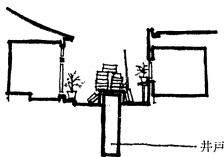
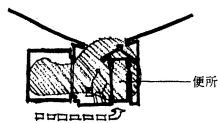
縦の道は雑賀崎の集落を特徴づける重要な要素の一つである。それは共同井戸を核とした小集団相互を結び合わせながら、同時に核家族居住の血縁集団全体をも結び合わせている。また、生活物質やサービスのための通路となるばかりでなく、集落各戸と外部社会とを結ぶ唯一のパイプでもある。

道を構成する素材は、古くはこの付近で産出する水成岩系の青石が石畳やふち石、さらに石垣や塀などに用いられているが、現在では石畳の部分はコンクリートになっている。

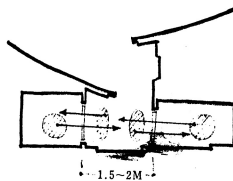
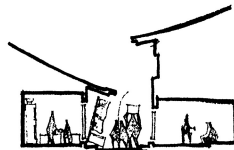
また集落の立地条件から、狭い敷地一杯に住戸が建てられるため、各戸の保有する外部空間が皆無に等しく、住戸自体もそれ程大きくないために生活の一部が道の部分にはみ出して行なわれている。また密集して建てられた住戸の唯一の開口可能な面は道側であり、（特に1階において）その上、道幅が広くなく庇、出窓その他の装置でインテリヤ化の傾向が益々高められる。この様な意味で縦の道は内部空間化された中廊下の傾向が強く、大家族居住の平面的展開という捉え方も可能になってくるのではないだろうか。



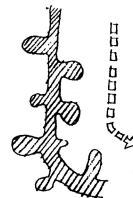
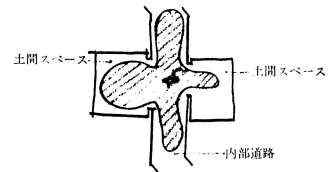
山手の家の視野



個人の家の領域が
内部道路を含んでしまうケース



内部道路を歩く場合の視線の関係

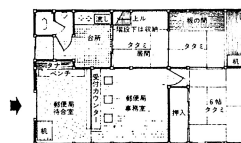
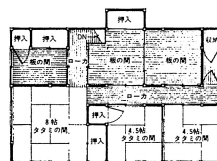
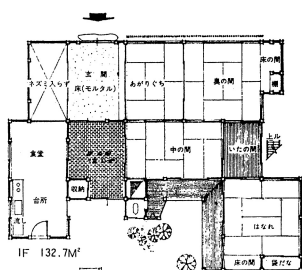
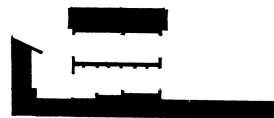
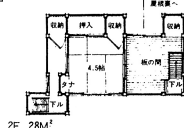
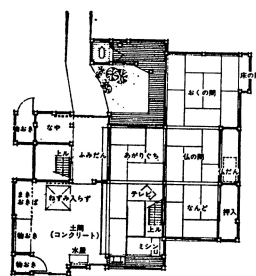
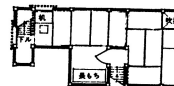


内部道路を歩く場合の個人の領域

3.7 住居

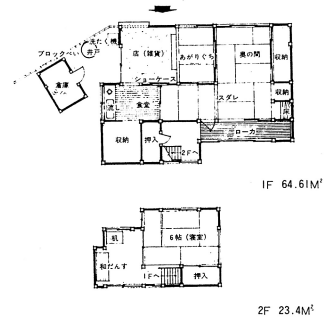
すでにのべた如く、住戸には一定のパターンはない。各住戸の配置は方位に関して一定でなく、縦の道への接続の仕方によって決定されている。海に近い平地の部分は密集して建てられているが、山の手は比較的隣棟間隔が広がっている。これは傾斜面の宅地造成が石積みによっており、石垣の法によって空隙が生じてくるからである。平地部分の住戸には、炊事場や土間部分に採光、通風のためのトップライトが多く見られる。一階部分の開口部、出入口はほとんど縦の道に面してとられているが2階に関しては各面にとられている。これは一般に2階平面が1階平面に比して小さいので各方向共下階より条件がよくなるためである。外壁は板張り、真壁、しっくい塗りなどが多いが最近建てられているものには、モルタル塗り、カラー鉄板張り等新しい建材のものも見られる。屋根材に関しては古い家は瓦葺きが多く、しっくいで止めてあるものの他に、古い漁網を屋根にかけた家もかなりある。一般の瓦葺きの他に平瓦、丸瓦の組合せによるものも見うけられる。建築上で特に防火的配慮がなされた家は少ないが共同生活意識が高く、ここ 200年以上火災の発生は皆無であるという。

郵便局

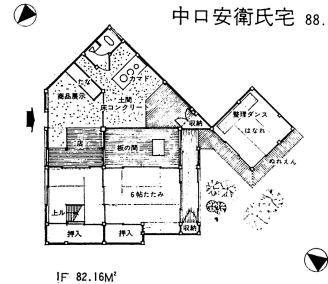
1F 77M²2F 79M²奥田又朗氏宅 156.0M²1F 132.7M²2F 28M²雑賀優氏宅 160.7M²1F 12.5M²2F 31M²東佳一氏宅 151.5M²

中口安衛氏宅

50~60年前に建てられたもので石けん、洗剤等日常品のほかにノート、鉛筆等の文房具類も売っている小さな店である。店といっても普通の家の土間を利用しただけのものである。中年の夫婦のすまいで主人は会社員、夫人が店をやっている。本瓦葺き、外壁は板張りである。



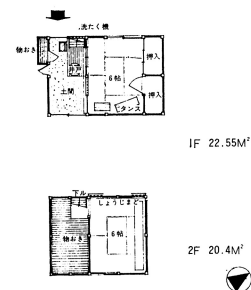
中口安衛氏宅 88.01M²



東山金之助氏宅 107.16M²

東山金之助氏宅

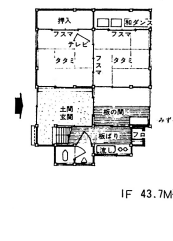
200年位前にたてられたものと主人はいつている。老夫婦2人で漁具を売りながらのんびりと暮している。客はほとんど雑賀崎の人で商売は安定しているという。子供は3人居るが独立して別の土地に住んでいる。平瓦ぶきでしゅくい止め、板ばりたて羽目。



浜田権之助氏宅 45.95M²

浜田様之助氏宅

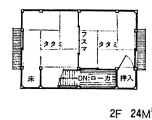
70~80年経過している家で最近改造の予定という。夫婦と子供2人のすまいである。内部に台所がなく、外の道路から炊事洗濯を行なう様になっている。本瓦葺き。



寺井俊男氏宅 67.6M²

寺井俊夫宅

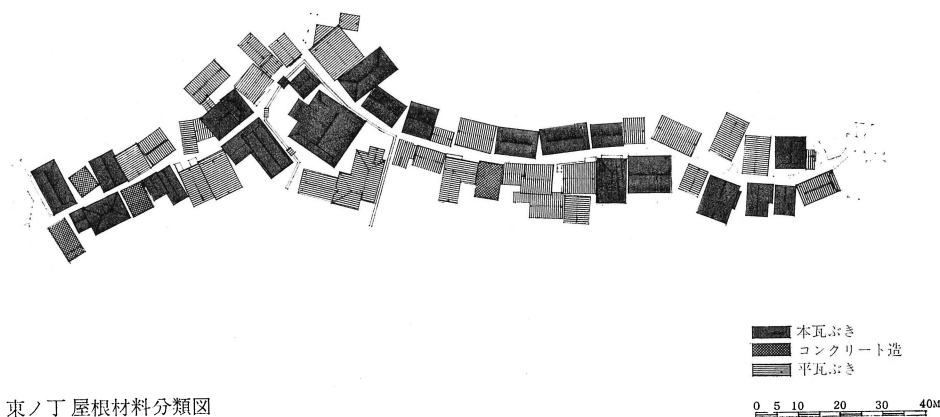
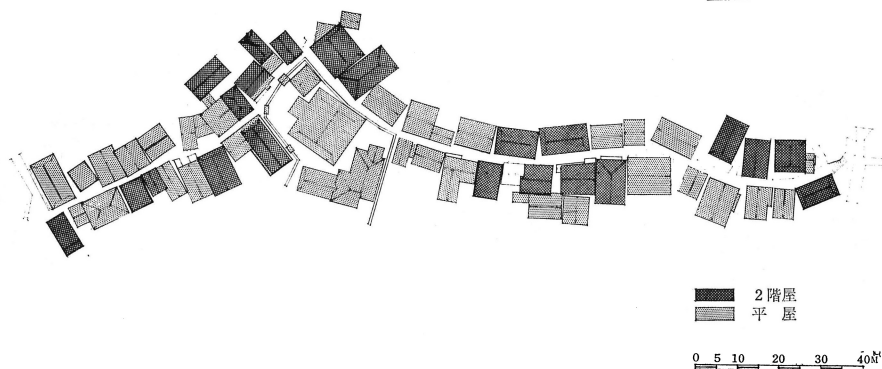
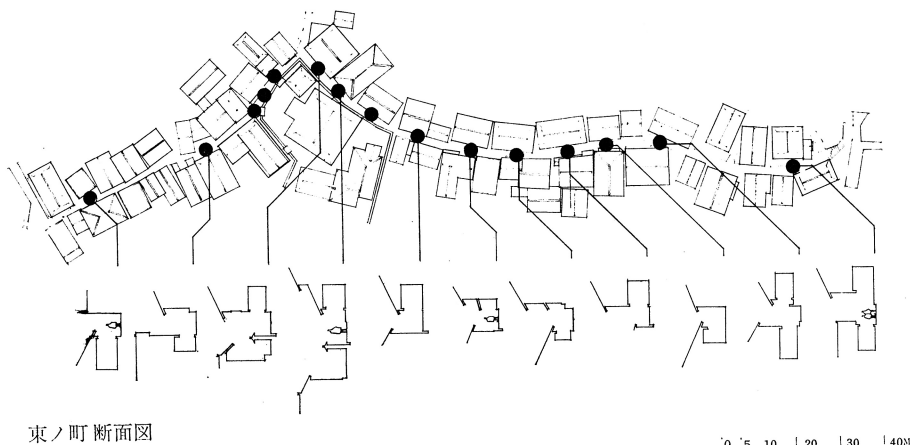
若夫婦に子供1人の住まいで最近改造したあとが見られる。職業は漁師。2階は寝室として使用されている。平瓦葺きで外壁は板張り。

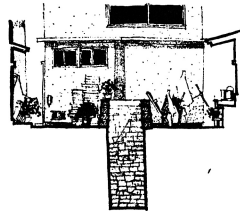
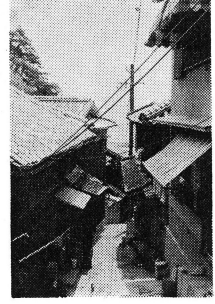


3.8 東の丁

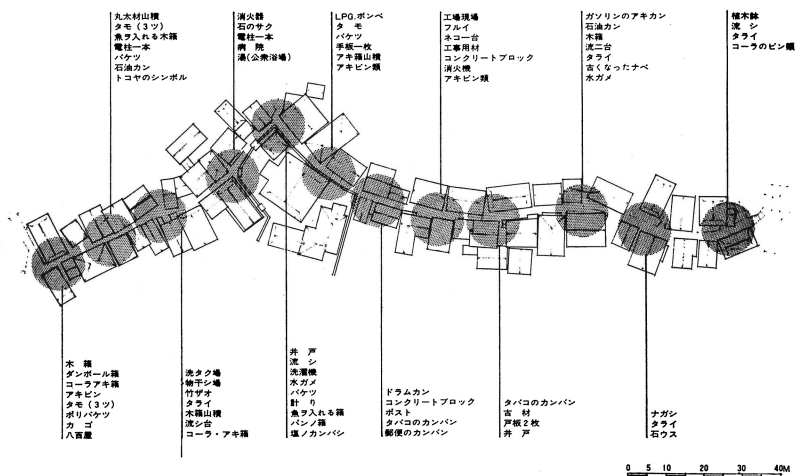
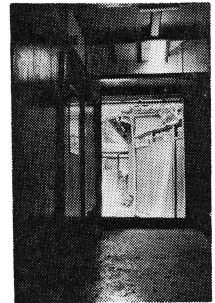
今回実測を行なった東の丁は、その名の示す通り雑賀崎の最も東側に位する部落で、縦の道に面して「極楽寺」や郵便局もあり、雑賀崎の持つ特徴を最も多く包含している所である。「東の丁」の東側は、大きく台地が

海岸近くまでせり出していて、この地区は「ごてんば」(御殿場)と呼ばれており、また「ごてんば」の西側には「どんべ」(土堀)の地名も残っている。その事からこの台地あたりに雑賀豪族の出城があったのではないかとわれている。

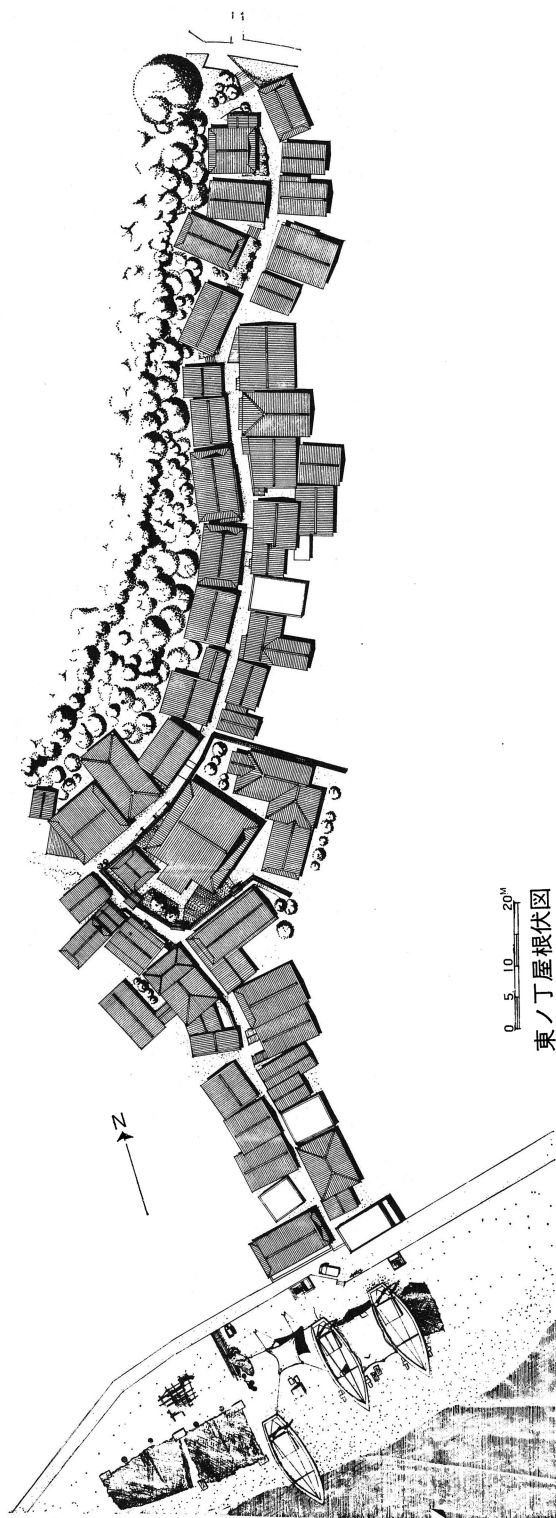


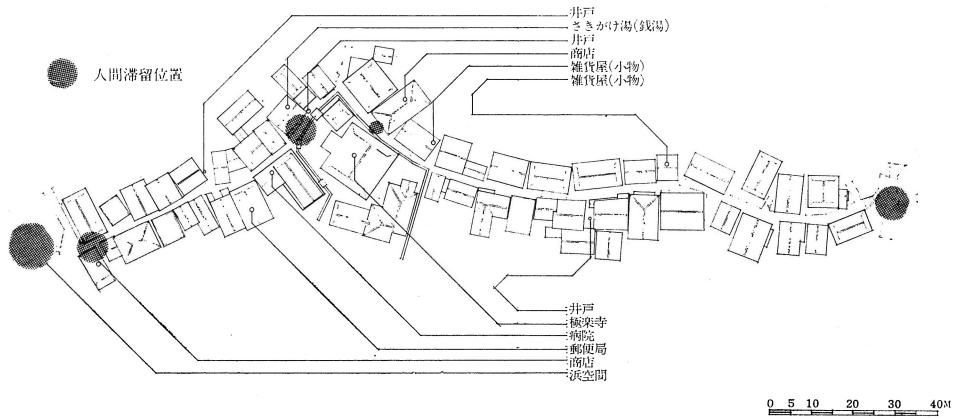


長六の井戸断面図

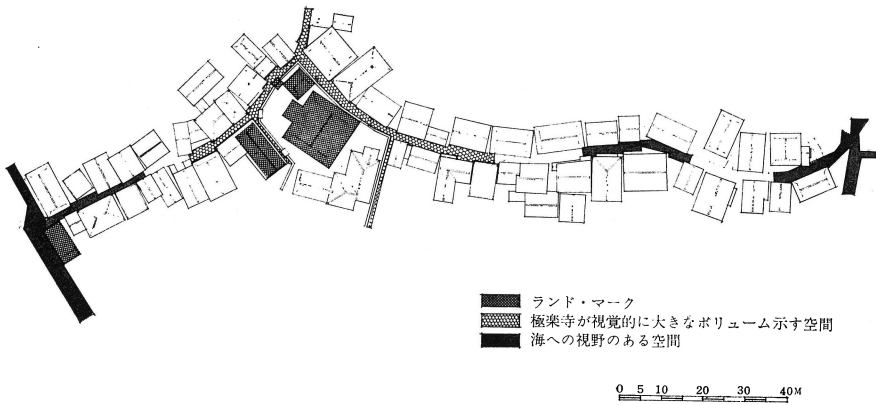


内部道路の構成要素

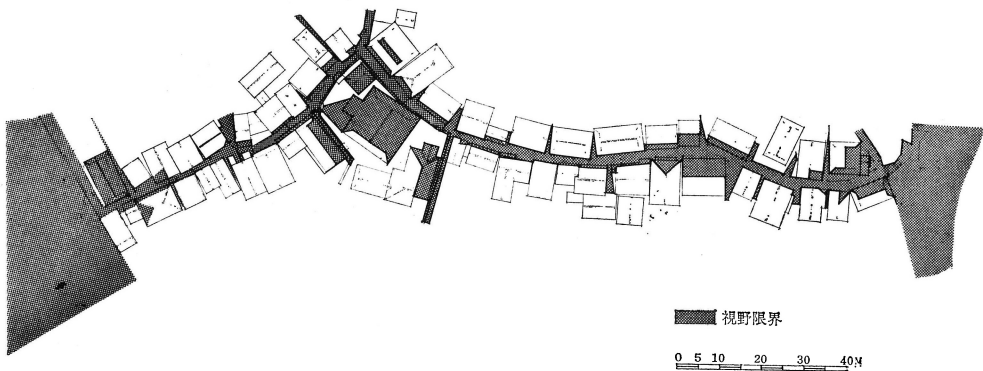




東ノ丁 人の滞留位置図



東ノ丁 ランドマーク・アイストップ・視界チェック図



東ノ丁 視野限界図

まとめ

雑賀崎はこれまでデザイン・サーヴェイで取り上げられて来た地域のような洗練された美しさや、造形的な秩序ある空間を持った所ではない。むしろその逆の無秩序と混乱に充ちたといった方が適切であるかも知れない。建物や石積みなど部分的には美しいものもなくはないが集落内部の生活も含めて、お世辞にもきれいだとは言えないであろう。

しかし、そこにはデザイン理論などというものにはおよそ縁のない人々の生活が、集落の長い歴史とかかわり合いながら作り上げてきた充実した質の良い生活空間がある。それは非常に心地よいものであり、気楽さがあり、暖かいものである。それは視覚的とか感覚的とかいったものでなく、もっと動物的本能的といったものであるのかも知れない。それは新宿や渋谷のパラック作りの飲み屋横丁の持つあのふんい気にやや近いがさらに良質のものである。それは最も優れた再開発やニュータウンの中でも見出し得ないものであり、理性や感覚を越えた別の秩序であり、充実した何物かがある。現代の建築家や都市デザイナーが作り出し得ない別の系列の秩序なのであろうか。それ故に我々は魅力ある集落や都市をたずねて新しい系の秩序を引き出し続けなければならないのかも知れない。

● 参考文献

- 1 紀伊続風土記
- 2 紀伊国名所図絵
- 3 考勘記伊国名所和歌集
- 4 南志雑集
- 5 日本の都市空間——彰国社——
- 6 都市のイメージ——ケビン・リンチ著——
- 7 現代の都市デザイン——都市デザイン研究体著——
- 8 建築文化
- 9 国際建築
- 10 都市住宅

調査年月日

昭和45年7月15日～8月3日（現地調査および実測）

協力機関

- 1 和歌山県庁
- 2 和歌山市役所
- 3 和歌山市教育委員会
- 4 和歌山警察
- 5 雑賀崎漁業協同組合
- 6 雑賀一族会
- 7 雑賀崎町会
- 8 町民諸氏